

づをすて、よるをひるに、参り給ひ」大和物語「よるともいはずひるともいはずにげていにけり」空穂物語中「よるをひるになしてなんいそぎまうでこし」讚岐日記「夜をひるになして物の聞えぬまでいそぐめれば」

○よろこびがらす 「からす鳴のわろき」を見よ。

○よろしく 佳 愈 千載集、雑中「やまひありて東山なる所に侍りけるを、よろしくなりて後云々」山家集、下、廿二「風わづらひて云々、よろしくなりなば」濱松、三「よろしやかなる御さまならば」

○よろぼふ 神代紀下に「就其樹下」徒倚彷彿「仁徳紀」十四「大御歌爾云々豫呂朋譬喻致伽茂うらぐはの木」催馬樂「酒飯にさけをたうてたべえうて云々なよろぼひそ」空穂物語、樓上、下二、源氏物語、夕顔其外多し。

○よわるけしき 夫木抄、卅三、雜、道因法師「みやきひくねりそのつなのも、がらみよわるけしきもみえぬ君かな」

○夜を日につぐ 夜繼日 竹取物語「中納言

よろこび給ひて云々、をのこどもの中にまじりて、よるをひるになしてとらしめ給ふ」孟子云「仰而思之、夜以繼日」

### わノ部

#### 附らるノ部

○らんか 「けんたい」を見よ。

○らんこ 「かひおほひ」を見よ。

○ろくだい 「かまど」を見よ。

○わうばんふるまひ 碗飯振舞 俗に、わうばん振舞といふは、碗飯振舞也。碗をわうといふも音便の轉なり。是は殊に下もはね字なる故に、上をわうと引也。田舎にては、正月始ての饗をもはらわうばんといひならへり。明月記「文暦二年十一月八日未時。治部卿來。日吉使每度例。府舞人陪從二具。近衛召人一具。送碗飯。參座主宮中此事。可相訪由被仰云々」應仁記上「今も程なく、末の松山と成て

新玉の年立歸りぬれば、文正の年號をば被棄、應仁に改め、内裏には元日政と、朝拜の節會を行はせ給へば、武家御所にも、三管四職を先として、近習外様の人々、色装の粧刷ひ、出仕を被遣しかば、上下萬民おしなべて、かゝる目出度事あらじと、喜悅の眉をぞ開きにける。恒例なれば、朔日の塊飯をば時の管領畠山左衛門督政長、何にも勝れて被勤之こと嚴重也」五色石、七、因没處安身。只得仍在賭場裡。尋碗飯吃」

○わうばふ 王法 これを世に佛法、王法といひふらして、佛家の私語のやうにのみおもへども王法は天皇聖王の法にて、漢土にてもいふこと也。後漢書、三十八 霍譚傳「譚聞春秋之義。原情定過。赦事誅意。故許止雖弑君。而不罪。趙盾以縱賊而見書。此仲尼所以禹王法。漢世所宜遵前脩也」

○わかけよそひ 夫木抄、卅三、雜、藤原季通朝臣「あふ事はわかけよそひのきぬなれやとしはゆけどもさせる日もなし」

○わかじに 若死 愚管抄、六「中納言にて若死をして」

○わかす 相摸集「つきもせず戀になみたをわかすかなこやな、くりのいでゆなるらん」新撰字鏡云「煖暄。阿太々牟、又、和加須」

○わかたう 若黨 雲井のみのり「明前に若黨をめして」

○わがぬ 緒 枕草子、三、十四「ねすみの尾のやうにて、わがねかけたらんほどぞ云々」大和物語「きれたる髪をすこしかいわがねてつゝみたり」

○わがの 鄙詞に、おのが物と云ふことを、是は我がのじやなど云わがの也。神樂譜、採物に「みてぐらはわがにはあらず、天にますとよをか姫の宮のみてぐら」萬葉集、七「三嶋江の玉江のまこもしめしよりおのがとぞおもふいまだからねど」

○わかばえ 若麩 榮花物語、若枝「としをへて待つる松のわかばえにうれしくあへる春のみどり子」

○わがふじん 和合神 近來和合神とて、仙人めきて賤しき男女の、花など持て向ひ立る鬨を弄ぶ事あり。是は蕃夷の者にて、云にもたらされど、和合神と稱して祭るならばは、やゝ久しきは

どより有けん。予上毛國にまかりける時、山中にて所々に祭りたる石像を見たる事あり。女神男神互に項に手を懸かはして立坐る姿也。石面の年號を見しに、大方は百年、百五六十以前年の年號にて、さして古きも見ざりけれど、建久弘安の比なるもありといへり。吾友酒卷立非が寫し來る圖あり。又曰く、古事記、上卷、須勢理毘賣命御歌に「如此歌即爲三宇伎由比二而宇那賀氣理互至今鎮坐也」とある、これ互に項に手を懸て、親く並坐と云也。かゝれば上毛國桐生の西北の山中より、阿志保庚申山など云あたりに、祭り傳へたるは、此八千矛神と須勢理毘賣命にて、これ古來よりの遺風なるへし。

○吾佛たふとし 此は吾有がたしとおもふ方のみ、もはらとして外に目なきをいふたとへなり。藤原伸文集「あが佛かほくらへせよ極樂のおもておこしをわれのみぞせん」

○わがま、 放縱 續世繼、むらさきのゆかり「ちゝおとわがまゝなる御心にてひがしきこともし給ひけるにも」榮花物語、玉のかざり「おのゝわがまゝにみがきたてゝ」

○わが身をつめつて人のいたさをしれ 後撰集

十四、戀六、右近「身をつめばあはれとぞ思ふ初雪のふりぬることたれにいほまし」源順集「身をつめば物思ふらし時鳥なきのみまどふ五月雨のやみ」拾遺集、戀、二、よみ人不知「春の野におふるなき名のわびしきは身をつみてだに人のしらぬよ」散木集、二「身をつめばしたやすからぬ水鳥の心のうちをおもひこそやれ」後漢書、六十六、劉矩傳「民有爭訟。矩常引之於前。提耳訓告」汲冢周書、助餘體氏。

無小不敬。如毛在躬。拔之痛不省」相摸集「はつかあまりのころ、ものごしにわりなきさまにてあひたりけるあしたに、身をつめばあはれとぞ、みし夏のよの有明の月の入もはてぬを」つめるをつむといふは源氏、紅葉賀に「太刀ぬきたるかひなをとらへて、いとうつみ給へればと云々」此つみ給ふと云は、つめるをいふなり。

○わきざし 脇差 太平記に脇差の太刀といふ事あり。伊勢貞丈刀劔問答に「脇差の太刀といふ事いかり。答、脇差の太刀といふこと太平記の外不見當候。南都の衆徒脇差の太刀など用意したりけ

る云々。是は全くの字餘りたる也。脇差太刀など用意してとあるべし。脇差の太刀といふ事やはある云々

○わきざしたち 徒然草、百十五段「あなかしこわきざしたちいづかたを見つき給ふか云々」わきざしたちは左右侍坐の者を云。諸請の字なり。台家の書に、大諸請とあるも其字義なるべし。

○わきひらをみす 今昔物語、十九、十一「西ニ向テ行クニ橋平ヲ不見」

○わく 雙 和名抄六「説文曰雙 越縛反俗收 絲者也。字亦作觸。唐韻云。柅女履反和名 雙柄也」後拾遺十八「修理太夫惟正信濃守に侍りける時、ともにまかりくだりて、つかまの湯を見て、源重之「いづる湯のわくにかゝれるしら糸はくる人たえぬものにぞ有ける」壬生忠見集「山よりたきおちたる所「みなそこのわくばかりにやくゝるらんよる人もなき瀧のしら糸」

○わく 虫のわくといふは、もと水の涌より出たる也。權中納言定頼集、おく山の瀧「くる人もなきおく山の瀧の糸水のわくにぞ任せたりける」忠見

なれど、綿を衣キヌにいれずして、今も着るとあるは、今の世のいはゆるわたこのさまなるべし」

○わたす 言ひ渡す 申し渡す 引導を渡す 此類のわたすは、祭かわたる、橋をわたる、又船をわたすなど、同言也。神代紀、上「建絶妻之誓。絶妻之誓此云許等度」私記曰「按古事記曰度ニ事度矣。故今尋彼文讀之。度猶如言度云々」かれば、かくさまに云わたすも古きよりの事也。

○わたつくり 綿造 神代紀、下に「瑤を造綿者として」とあり。

○わたまし ワタリイマシノ約。中務日記「その日ときは井どのいづみどのへ御わたましに」空穂物語、祭使「はやわたますべき心づかひせしめ給へ」唐鏡「そのわたましの夜」

○わたりあふ 夫木抄、廿四、雜、祭主輔親「君にかくわたりあひかはながらへておもふこゝろのあせずも有かな」

○わたちもの 渡物 今云ねりもの也。東鑑卅二「嘉禎四年八月十九日。今日御靈祭也。將軍家於今出河殿御見物間。渡物風流結構異例云々」盛衰

集「水底のわくばかりにはくゝるらんよるひともしき瀧のしらいと」

○わけぎ 「ひともし」を見よ。

○わざと 惠慶法師集、水鳥浪にあそぶ「みる人はおきつあら波うとけれどわざとなれぬるをしたかへりも」

○わざく 態々 東鑑、七「但態々不及相尋事也」

○わさん 和讃 漢讚 平戸記「寛元三年三月廿八日條云「此間誦今度新記讚。此讚三度許。念佛相交誦之。其後誦新五口口讚。次誦其和讚。是皆予制之作之也」

○わたさぬ 綿衣 東鑑、卅四、廿二、若君御着「其後着始綿衣給云々」今昔物語、十九、十三、我ガ着タル綿衣ヲ取セテケリ」

○わたこ 綿子 童蒙抄に「しらぬひのつくしの綿の注に、筑紫の綿のひろくよきを、きぬにもいれずして、たゞ縫て、昔はきけり。今やうもさるべきやむごとなき人など、さてさる事あまた聞ゆべし」宣長云「しらぬひの説はいふにもたらぬひが事

記、四、十三「其願書ニ曰、日吉社ニテ臨時ノ祭ヲ居、百番ノ御子ノ渡物、百番ノ一ツ物、百番ノ流馬、百番ノ競馬、百番ノ相摸云々」

○わなく をどく わなくふるふなど云。戰慄の字をしかよめり。新撰字鏡に「性胡高反讖也。和奈々久、又乎乃々久」とあり。をどくするといふも是也。

○わびごと 竹取物語、上「世中に多かる人をだに、すこしもかたちよしときては、見まほしうする人たちなりければ、かぐや姫を見まほしうて、ものもくはず、思ひつゝかの家に行て、たゞすみありきけれども、かひ有べくもあらず。文をかきてやれども、返事もせず、わびうたなど書てつかはせどもかひなし云々」此わび歌、おもひこうじせん方つきての歌のよしなれば、今云わびごともその心はへ似たり。(猶「わびすみ」を参照せよ。)

○わびすみ わびごと わび遣り こまる 眞淵云「わびはうらぶれの約れる也」と。今按に、うらぶれは物思ひある時、項を垂て愁へるを貌より云言也。わびは、わたかまるなどの和にて、なす手

言也。わびは、わたかまるなどの和にて、なす手

を出す、心の屈り縮まるより云言也。故に窮るといふ意に用へり。即俗に、こまるといふも屈り縮まるよしにて、同じ心ばへなる詞也。されば、わび住、わび言などいふは、其理りよく叶ひたり。茶の湯の敷寄屋などを、わびたりなどいふは、賤がわびずまひを摸したるをいふ也。萬葉集、四冊四に「ものおもひ和備居時二」又冊九「和備染賣跡」又「今者吾羽和備會四二結類」又冊九「丈夫之思和備作」又冊四「遠有者」和備而毛有乎」十一「里遠」戀和備爾家里」十二「國遠見念勿和備會云々」續日本紀、宣命に「言牟須倍母無爲牟須倍母不知爾悔備賜比和備賜比」倭姫命世記に「宮處、覓佗賜比天。其處乎和比野止號支」古今集「わび人のわきて立よる木のもととは頼むかげなく雨ぞもりぬる」

○わび造り 「わびすみ」を見よ。  
 ○わらうづ足をくふ 金葉集、連歌のはし書に「和泉式部が賀茂にまわりけるに、わらうづにあしをくはれて、紙をまきたりけるを見て」とあり。  
 ○わらしべ 宇治拾遺物語、七十一「わらすべといふ物たゞ一筋握られたり」

○わらはあそび 源氏物語、繪合「御わらはあそびにひるなどわたらせ給ふことは」山家集「竹馬を技にも今日はたのむかなわらはあそびを思ひ出つ」

○わらはく 源氏物語、朝顔「ちひさきは、わらはけてよろこびはしるに」竹取物語「中納言は、わらはけたるわざしてやむことを人にきかせじとし給ひけれど」

○わらはすまひ 童相撲 三代實錄云「貞觀三年六月廿八日辛未。天皇御前殿。觀童相撲。先是近臣分頭相折。各爲左右。以右大臣正二位兼行左近衛大將藤原朝臣良相。爲左方首。以大納言正三位兼行右近衛大將源朝臣定。爲右方首。左右標。并樂人相撲童等。經左右仗下。入住殿前。九番相撲。後有勅命。停。左右互奏音樂。種々雜伎散樂。透撞咒擲弄玉等之戲。如相撲節儀。廿九日壬申晦。帝御南殿。觀童相撲。如昨儀。同四年秋七月五日壬申。天皇御前殿。觀童相撲。其儀一如去年。六日癸酉。亦御同殿。觀童相撲。同五年秋七月八日戊戌。天皇御南殿。觀童相撲」

○わらはごゑ 「くさかり笛」を見よ。

○わらはな 幼名 榮花物語、月宴「高光少將ときこえつるはわらは名まちをさきみときこえしは」

○わらや 藁屋 夫木抄、十六、冬、權大納言忠信「風さゆる關のわらやはあとふりてたがすむねやに月のすむらん」

○わらんち 藁沓を中昔後の音便に、わらうづともいへるを、又轉訛してわらんちといひならはし也。鞋字をよめり。明月記「文曆二年十月十五日云々。次老者頻爲御稔行幸。本隨身童等。付花事有不可然之説。先々如何。又供奉諸司不具雜色敷。隨身市比之下着沓敷。將藁沓敷。如何云々。宇治左府御記藁沓之由被載云々」今昔物語、八「致經その由を承りて、常に宿直所に弓胡録を立、藁沓一足を疊の下にかくして、下衆男一人置たりけるが云々。御馬候として引出せば、致經藁沓をはきながら馬にのりぬ」伊勢家諸禮式「足中に禮はなきもの也。いづ方もあし中ぬぐ事はなき也。公方様へも御縁のきはまではく也。さりながら又事によりてはかぬ事も

あるべし。わらんちも禮はなしといへり」

○われ木 新撰六帖、二、民部卿爲家「みを山やそまのわれ木のかたおちにすてられながらふしは忘れず」

○われくだく 新撰六帖、三、民部卿爲家「河さしにしがらむ竹のわれくだく我よやくてしづみはてなん」(猶「ひしぐ」を参照せよ。)

○われひ 割樋 夫木抄、卅三、雜、民部卿爲家「かけわたすたけのわれひにもる水のたえく」にだにとふ人ぞなき」

○われふね 夫木抄、廿四、雜、西念法師「つさもせぬ涙の川のわれふねのあふせなきだにくらやはてなん」

○われほめ 自讃なり。源氏物語、梅枝「われほめをし給ふ」

○われもめはあり 神樂譜、早歌「あかりふむな、しりなるこ、われもめはあり、さきなる子」  
 ○われら 我也。おのれ一人にいへれば、らは助語のみ。等の意にはあらず。古今集長歌、伊勢「なみだのいろの、くれなるにわれらの中の、しぐれに

て「貫之、大井川序「われらみじかきこゝろの」拾遺集、難下、みつね「むかしよりいひしきにけることなればわれらはいかでいまはさだめん」後拾遺集序「仰をうけたまはれるわれら」落窪物語、四「われらがためにも大事也といひて」

○わろくしたらば わろくしたらば、事の破れにならねばよいなどいふ此心を、文詞には、よくせずばといへり。善悪うらうへのたがひなれども、其意は同じ事也。枕冊子、二「おとなる子どもあまたようせずば、うまごなどもはひありきぬべき人の云々」源氏物語、桐壺「坊にもようせずば、此みこ居給ふべきなめりと、一のみこの女御はおぼしうたがへり」

ゐノ部

○のだけ 居長 しのびね物語、上「のだけ」のほども「しく」榮花物語、根合「かたほにものし給はん人ののだけたかにみすくるに倚子のおまじにのぼり給はんは」空穂物語中「のだけ三尺ばかりの白がねのこまいぬ」濱松物語、四「のだけのほ

どに御しくまなくかゝりて」

○のど 井所 井を井所と云は、所の字用なきやうなれど、催馬樂、田中井戸に「たなかののどにひかれるたなき云々」とあり。こは、もと走井、流井などもいひて、川などにて、其汲所を井所といひしが、筒井、板井にも移り來し詞ならん。竈を竈所といひ、紋を紋所といふも同例也。

○のなか 萬葉集、三十二「難波居中」伊勢物語に「ななか人の言にしては長しやみじかしや」

○のなり 居形 もとのまゝにて居る事也「けさみれば花もすきふになりけり風はゐなりに吹とみつれど」この歌稻荷にいひかけしか。假字たがへり。

○のこ 玄猪 小野宮年中行事云「初亥日。内藏寮進殿上男女房料餅事折櫃」とある、これやものに見えたるはじめならん。されど其來歴詳ならず。後世の書に、いろくといへど、皆無稽の説のみにとりがたし。玄猪、名義抄辨曰「和漢トモニ玄猪ノ餅ヲ祝フ。其源始詳ナラズ。書籍ニ載ル其徴トスベキナシ。延喜式ニ出ルヲ見レバ、事實尤久シキモ

ノ也」とある、此云る所はよけれど、玄猪の事延喜式にはなし。公事根源に引きたるによりて、同じくそらごとせる也。さて餅も古くは粉餅を用ひし事と見ゆ。河海抄「掌中曆曰。亥子餅七種粉大豆、小豆、餅、栗」とありて、凡ていろくの粉を以て練りたるさま也。今玄猪の御手かちんといひて、いろくに色どるは其遺風なるべし。

○のやぶ 敬 佐渡の人の詞に、人をのやぶといへり。恭敬の意をのやまひと云は常なれど、のやぶとも活くべきなり。書紀に禮神、禮賢などよみたり。これらの章夜は、宇夜麻布、宇夜宇夜志な

どの宇夜と一つなり。又無禮をのやなしといへるは古事記、高津宮段に「其王等因无禮而退賜穴穂宮段に「言以白事者。思无禮」武烈紀に「無敬」續日本紀、廿に「頃者。王等臣等乃中爾。無禮久逆在流人止母在而」廿四に「汝乃多米仁無禮之豆不從」などあれば、伊夜と書をば非也といへり。按にいつくしぶ、うつくしぶなどの例を以ていは、うやまふ、いやまふとも通ふべきか知がたし。かの無禮を景行紀には、無禮ともあり。されどまさしく伊

也那久、伊也麻布など書る假字の例見及ばず。猶心つけて見べき也。こはたゞ言のついでにいふのみなり。

ゑノ部

○繪がまし庭 藤原爲忠朝臣集「繪にかまし庭の洲濱のつるをみてとびていぬべき思ひけもなし」

○ゑぐ 後撰集、春、上「きみがため山田の澤にゑぐつむとぬれにし袖はいまもかはかず」曾禰好忠集、春のはじめ「雪消えはゑぐの若なも摘べきを春さへはれぬみ山邊の里」

○ゑくば 和名抄云「齧。淮南子注云。齧。業和名惠久保。面小下也」

○ゑた 或書に云「古へは、ゑとりと云き。餌取と書く。餌は鷹等の餌に生肉を取故也。穢多は如字けがれ多き也。漢土にては、屠者と云。天竺には旃陀羅と云も、餌取體の膩き者也。又屠殺の字をもゑたと訓。和名抄に「屠兒。和名惠止利。屠。牛馬肉。取。鷹鷄之餌。之義也。殺。生及屠。牛馬肉。取賣者也」翻譯名義集と云書に「旃陀羅。此云屠者」法顯傳

云「名爲惡人、與人別居入ニ、城市ニ則擊竹自異、人則避之」といへるは天竺の國の事なるを、此方の今世のゑたに似たることなり。富家語抄に「ゑたをば穢多と書事は宛字なり。燕丹と書て、よこなまりにて燕丹と訓がよし。昔異邦の燕の太子丹と云人、丹波國に住居せり。日本の人、異朝の何氏やらんしれぬ人として參會せず、日本の人交はらざるが故に、家業なし。さるによつて、牛馬の捨て有を拾ひて、皮を剥ぎて家業にせしより起れり。燕丹軍三千、日本へ渡る時、男女數人來ると見えしなりと有り。按に、燕丹軍三千日本へ渡ると云事何の書に出しやいまだ所見なし。猶再考すべし。

○ゑつばに在る 今昔物語、廿四、廿二女房共皆エツボニ入ニケリ」盛衰記、卅四「大名小名興ニ入テエツボノ會也」宇治拾遺、十四、十二ある人皆ながらすやちるつばに入にけり」

○ゑにかゝまほし 大鏡、一「したりがほにわらふかほつき、ゑにかゝまほしくみゆ」

○ゑのころ 犬之兒等の義なるべし。和名抄に兼名苑云「犬一名尨。爾雅集注云「狗、犬子也。和名惠

沼又與犬同」とあれば、伊奴を惠奴とも云しなり。但此和名抄の記しさまは心得がたし。字を落して後亂れたるものなるべし。犬は元より伊奴と云つれば兼名苑云「犬一名尨和名伊奴一云惠奴。云々。狗犬子也。和名惠乃古呂」などありしならん。

○ゑひさまたる 沈瀨沈瀨武列 後拾遺集、雜四「まつりのかへさにゑひさまたれたるかたかきたるを」

○ゑひなき 醉哭 萬葉集三十「かしこしと物いふよりは酒のみて醉哭爲師まさりてあるらし」世のなかのあそびの道にたぬしきは醉哭爲爾ありぬべからし」もたをりてさかしらするはさけのみて醉泣爲爾なほしかすけり」

○醉に乘る 後撰集、十五、雜、一「太政大臣の左大將にて、すまひのかへりあるじ、侍りける日中將にて參りて、事をはりて、これかれまかりあが

れけるに、やむことなき人二三人ばかりとめて、まらうどあるじ酒あまた、びの後醉に乗りて、子どものうへなど申けるついでに」

○ゑぶくろ 餌袋 金葉集、雜部上、櫻井尼「のきばうつましろのたかのゑぶくろにおきゑもさゝでかへしつる哉」

○ゑばうし 鳥帽子 太平記、十三、龍馬進奏の條に、細烏帽子といふこと見ゆ。山家集「しのためてすゝめ弓はるをのわらはひたひゑはしほしげ成けり」増鏡、月草の花「内大臣殿は、御子の別當通冬ともなひて、中略別當は道のほどのわりなきに折るばうしにぬのひたゝれといふ物うちきて」枕冊子十「長ゑばしゝてさすがに人にみえじとまどひ出るほどに」

○ゑま 繪馬 繪馬と云ふ事朝野群載、二「献供物於北野廟一敬白献上色紙繪馬二匹」寛弘九年六月廿五日」とあり。又宣胤卿記「永正十七年十一月九日明日多武峯社遷宮。關白御使衛門佐十宣綱中宣秀相伴下。繪馬二枚進云云」とあり。

○ゑみの内の刀 夫木集、卅二、權僧正公朝「手

にとれば人をさすてふいがぐりのゑみの内なる刀おそろし」

○ゑんざ 圓座 中務日記「すのこにゑんざをして、關白、大臣のはあつゑんざ、其外の公卿のはうすゑんざ也」古語には、わらうたと云り。和名抄に「圓座和名和真字大伊勢物語に、布引瀧をいへる所に「瀧のかみにわらうたのおほきさしてさし出たる石あり云々」枕草子に、雪の山をいへる所に「やがておきゐて、げすおこさするに、更におきねば、にくみはらだゝれて、おき出たるを、やがてみすれば、わらうたばかりになりて侍る。云々」

○ゑんば 「とんぼう」を見よ。

○ゑんやらう 「やらう」を見よ。

○ゑんりよ 遠慮 今物をひかへて、辭する事などを云はあたらす。論語「衛靈公篇。人而無遠慮必有近憂」史記、吳王剛傳「爲國遠慮」

をノ部 附ん

○をいく 唯 榮花物語、月宴「をいく

さなり／＼との給ふほど」源氏物語、玉鬘「をいさ  
り／＼とうなづきて」今昔物語、廿五「守ヲイ然ル  
ニテハ其刀ヲ拔ヨ」源氏物語、宿木「をいや聞し人  
なり」  
○をかぶ 夫木抄、十二、秋、民部卿爲家「あ  
づまの、岡生の稻はいでさればなにをたのみとすぐ  
る我身ぞ」

○をかむ 昔は佛を拜むにも被せしなり。更級  
日記、初瀬詣の條「はつせ川などうち過て、その夜  
みてらにまうでつぎぬ。はらへなどしてのぼる。云  
々」推古紀歌に「鳥呂餓彌豆菟伽摩羅武」云々。  
私記に「謂拜爲乎加無言乎禮加々無也」とあ  
り。されば呂を省ける意にて、もとは身を屈めて匍  
伏よしなり。神代紀一書に「彦火夕出見尊海宮に  
して云々。於中床則據其兩手」と見え、推古紀  
十二年詔に「凡出入宮門以兩手押地兩脚跪之越  
相則立行」萬葉集、二五丁に「鹿自物伊波比伏管」  
三七丁に「十六自物折膝伏」などある皆折屈むるま也  
漢ふみ魏志の皇國傳にも、傳辭説事或踣或跪兩手  
據地爲之恭敬と見ゆ。かゝれば後世神をいつく

には嗚呼を嗚許と作り。今は古本を以て引り。此事  
西宮記にも見えたる。其には嗚呼者とあり。所謂と  
云ことはなし。此は可笑き伎をする者を云るなり。  
漢籍にも後漢書に、烏潏蠻と云國ありて烏潏人とも  
あり。文選吳郡賦などにも見えたり。文粹辨散樂  
村上天皇御製文に「暢轡來朝。自爲解頤之觀」と  
あるも漢國の事なり。暢轡字は、嗚許の誤なるべし  
かゝれば哀許と云言は、もと漢籍より出たるかと思  
ふ人もあるべけれど、然には非ず。既に此天皇の大  
御歌にあれば、元よりの古言なり。然るを、後に漢  
籍にも、嗚呼、烏潏と云ことのあるに因て、かの三  
代實錄の文などは混ひつる物とこそ聞ゆれ。古言の  
哀許はかの嗚呼、烏潏などは本より異ことなり。  
中昔に、をこなり、をこがまし、をこの者など云る  
も、古言の哀許なれば、嗚呼字などを當るは非なり  
又書紀に、于古とあるを、尾籠也と釋に云るは、借  
字に如此書ならへるなるべし。さてこそ後世に、其  
字音にびらうと云言も出來つらめ。されど此字に依  
て意を云る説は非なり」といへる此説大かたよろし  
猶いはり、從是以前神武天皇御段に「兄宇迦斯を嘲

に兩段再拜などいひて、拍手などするはなか／＼に  
ひが事也。本居氏云、今世の俗には、袁賀牟と云は  
た、掌を合すこと、心得たると、佛法の拜より云る  
ひがことなり。又尊むべき物を見奉ることを、袁賀  
牟と云も中昔までは無きことなりといへり。  
○をがら 會禰好忠集、六月初「夏はぎのあさ  
のをがらとあだ人の心かろさといづれ増れり」  
○をくみ 「おくみ」を見よ。

○をこ をかし 古事記中、神武段に「疊々  
志夜胡志夜。此者伊基能布會。阿々志夜胡志夜。此  
者嘲咲者也」傳釋云「胡志夜は袁胡志夜の遠省ける  
にて、袁加志夜と云に同じ。袁加志と云は、即袁許  
志なり。袁胡は、袁胡賀麻志などの袁胡なり」とあ  
り。げにも、をこをかしとは、もと同言にて、を  
こは即をかしかるべき行跡をするを云詞也。又曰  
古事記傳、明宮段云「袁許は中古の書どもに袁許な  
りとも袁許がましとも、袁許の者とも云る是なり。  
袁加志と云と同言にて意も同じ。袁加志は即袁許志伎な  
り」三代實錄卅八に「右近衛内藏富繼。長尾末繼。  
伎善散樂。令人大咲。所謂嗚呼人近之矣。(印本

笑ひ給へる處に「愛々胡志夜胡志夜此者伊基能布會  
阿々胡志夜胡志夜。此者嘲咲者也」とある、此志夜  
胡志夜は志夜は、今も云志伊悔しいなど云志伊と同  
じくて、たゞ詞也。胡志夜は袁許志夜にて、可笑の  
意なるを上の志夜よりの續きに引れて、袁を省ける  
也。されば元よりの古言なる事明けし。さて事のつ  
いでに云、三代實錄などにいへる散樂の伎は、實は  
可恰き方なるを、それをも袁許といへる以ても、  
可愛も可笑も、袁迦斯の假字なる事を知るべきなり  
若文粹に、爲解頤之觀とあるを以て、彼も猶可  
笑也と思ふ人有べけれど、散樂は猿樂にて、もと  
猿女の俳優なりければ、神を慰め人を樂しましめん  
とてのわざなるから、かの解頤も猶皆樂しくおもし  
ろき方也。俗に笑止なる意にもあらず。又卑しめ貶  
しめて笑ふ方にはあらざる也。されば神樂にも、代  
々此俳優を、阿那於母志呂といひてゑらぎ笑ひ傳へ  
たるにあらずや。  
○をこがまし 落窪物語、一の下「いと嗚呼が  
ましと少將つく／＼とかい間見ふしたり」云々。  
○をこる 嗚許繪 今昔物語に「今はむかし

ひえの山の無動寺に、義清阿闍梨といひし僧、繪をこのみて、をこ繪の上手也。筆はかなくなつたてたるやうなれども、たゞ一筆にかきたるに、こゝちのえならず見えて、をかしき事かぎりなし」

○をしき 空穂物語、藤原の君、卅四「うへのはかまあを、きたるわらはまわれり。宮の内の君にをしきして物まわれり」夫木抄、卅四、釋教、西行上人「しきみおくあかのをしきのふちなくばなに、靄の玉とまらまし」拾遺集、物名に、くち葉の折敷「あしびきの山の木の葉のおち口は色のをしきぞあはれなりける」

○をしく 今も警鐘の詞をしくといへり枕冊子「日のおまじのかたに、おものまゐる足音たかし。けはひなどをしくといふ聲きこゆ」

○をぢ 「おぢこ」を見よ。

○をぢさま 「いとこ」を見よ。  
○をつと 夫 和名抄云「夫。白虎通云。夫猶扶也。以道扶接也。和名乎宇止。一云乎止古」とあり。乎宇止は男人を音便に唱へたるを、衰止と云は又其上の音便にて、眞人を末止といふ類也。

○をとこかけ 男影、人影ノ影ナリ。濱松中納言、三「そればかりををとこかけにはみ給ひつゝ、」

○男立 仁徳紀大御歌に「于磨臂昔能多兔塵虛等太豆」萬葉集、十八に「世人能多都流計等太豆また大伴等云々立流辭立」などある。此立は、今世にも誓言を立るなど云と同じく、男立などいふ立に似たり。續日本紀、四に「天皇御世々々。天津日嗣止高御座爾坐而。此食國天下乎撫賜比惠賜事者。辭立不在云々」十に「此者事立爾不有。天爾日月在如。地山川有如。並坐而」十七に「云々事立不有云々」萬葉集、廿五丁に「都加倍久流。於夜能都可佐等。許等太豆々佐豆氣多麻徹流」伊勢物語に「正月なれば事立とて大御酒賜ひけり云々」

○男 以強 爲貴女 以弱 爲美 後漢書列傳七十曹世叔妻傳云「陽以剛爲德。陰以柔爲用。男以強爲貴。女以弱爲美。故鄙諺有云。生男如狼猶恐其尪。生女如鼠恐其武。」本朝文粹、後江相公婚姻賦云「至剛者男。至柔者女」

○をどく 「わなく」を見よ。  
○をながとり 尾長鳥 藤原爲忠朝臣集「と

びかふにさはるやつらき尾長鳥しごきておる、松のうはえた」

○をはからす 後世のさとりたる草紙に、をは打からす浪人などいふ詞多くみゆ。萬葉集、鶯の歌に、尾羽打觸といふにあはせ見れば、浪人のものげなき袖袂ひきつくりひてあるを、羽ぬけ鳥のものわびしげに、尾羽打ふるにたとへていひそめたる詞なるべし。

○をばさま 「いとこ」を見よ。  
○尾花色のこはひ 空穂物語、菊宴「尾花色のこはひなどまゐるほどに」(猶「おはぎ」を参照せよ)

○をばなのかゆ 尾花の粥 康富記「文安五年八月一日云々。今日尾花之粥事其申來何事哉。自然見及歎之由令問之給。未見及。未知其子細候由返答」玉勝間に尾花の粥の事見えたり。(猶「おはぎ」を参照せよ。)

○尾張焼陶器 尾張國にて、陶器を焼く事、俗説に瀬戸藤四郎と云者よりはじまりたるよしいへど、古き時よりの事也。延喜式卷廿三民部式云「年料雜器。尾張國盜器大椀五合云々。中椀五合云々

ををりから 藤原爲忠朝臣集「ゆふだちの雲風さわぐをりからにこすゑの蟬もこゑしきる也」

○をりめ 折目 夫木抄、四、春、信實朝臣「ちるをわがをしみもちたる後までもをりめはつけ

小椀五合云々。茶椀廿口」と見えたり。

○をひ めひ 甥 姪 和名抄云「爾雅云。兄弟之子爲甥。和名乎比」また「姪。釋名云。兄弟之女爲姪。和名米比」とあり。

○尾鰭の附たる魚 人を襲するに尾鰭の付たる魚も献なでなどいふ事あり。古事記、上卷、大國主を齋る祝詞に「口太乃尾鰭鱸。佐和佐和邇控依騰而」とある此尾鰭は則尾鰭の付たるよしにいへる詞也。

○をひくとなく 讀岐典侍日記上廿六「晝の聲どものやうに泣あひたる中に、三位の御聲にて、哀かやうに云々いふべき事もなく、しなし參らせつるは、いかにしつる事ぞや。是たすけよや、たおはしますらん所へ我をめせや。をひくとくどきたてなかる、をきくぞいといたへがたき」

○をさいれ 新撰六帖、五、知家「まどをなる賤がうみをのさいれに心とうすきあさの衣手」

○をりから 藤原爲忠朝臣集「ゆふだちの雲風さわぐをりからにこすゑの蟬もこゑしきる也」

○をりめ 折目 夫木抄、四、春、信實朝臣「ちるをわがをしみもちたる後までもをりめはつけ



七櫻うすやう」

○をんなこと 女言 源氏物語、繪合「かや

うのをんなことにてみたりがはしくあらそふに」

○女を鬼オンナオニといふ 藤原基俊家集、上「たゞひと

つ門の外にはたてれども鬼こもりたる車なりけり」

拾遺集、雜、下「みちのくになどりのこほり、くろ

づかといふ所に、重之がいもうとあまたありとき、

ていひつかはしける「みちのくのあだちがはらのく

ろづかに鬼こもれりといふはまことか」

○ん 无字の略也。本居氏説に「片假字の二の

末をはねてンの字を作り、平假字のにの末をはねて

んの字を作るなり」といへるもわろく、又名鳥隨筆

に「んは片假字平假字ともに、云字より作り出せし

なり。そは云字の下を省き、上の二の下をはねて、

片假字の文字となし、又上の二を省きて下のムをく

づして、んとはなしたるならん。字書に云、雲字于

分切言也。語聲也。とあり」と云るもしひごととなり

行成卿の眞跡七伊呂波中に、无先んとかき給ひ、古

き片假字の中にしと書きたれば、片假字のんもも

と、无字の上の二をはねたる也。かくて紀貫之の筆、

古今、秋下、又堤中納言集、又浪華帖等の古假字の中  
に、言の初に置きて「んらさきの」「んかしより」  
「んしのねに」など書たれば、本はたゞ牟無などと  
おなじく、むの作字なりつるが、中古以前唐音のウ  
ンといふ音の移りて後、むの假字のあるが中にも、  
んとはねて、ウンの假字に當ならひきつる也。然る  
に書を好まぬ人は只理に走りて、古人の手跡を廣く  
見ざる故に、右の説の多かるにこそ。

俗語考終